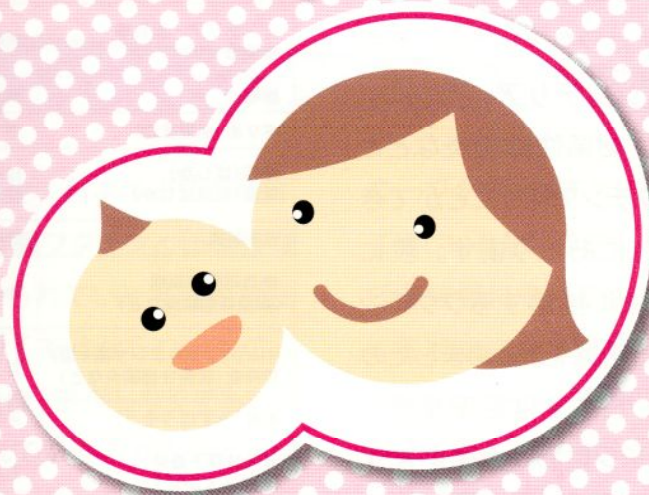




子どもたちのための
ワクチンのはなし



ワクチンのことわかるハンドブック

最近、日本でも接種できるワクチンが増えてきました。子どもたちを守る

Q ワクチンで防げる病気のことを教えてください。



A

菌部先生：子どもは生まれてからさまざまな感染症にかかりますが、この中にはワクチンで防げるものがあります。ジフテリア、百日咳、破傷風、はしか、細菌性髄膜炎などといった病気はワクチンで防ぐことができる病気(=VPD*)にあたります。表に日本の子どもが主に接種するワクチンと、それで防げる病気をまとめましたのでご覧ください。日本では定期接種と任意接種のワクチンに分かれていますが(P2)、定期・任意にかかわらず、基本的にワクチンで防げる病気(VPD)はすべてワクチンで防ぐ必要があると考えてください。

ワクチン接種は、大切なお子さんの命と健康を守る第一歩です。

*VPD：Vaccine (ワクチンで) Preventable (防げる) Diseases (病気)。ワクチンで防げる病気のこと。

【ワクチンで防げる子どもの病気(VPD)】

ワクチンで防げる病気	ワクチン
ジフテリア・百日咳・破傷風	三種混合(DPT)ワクチン
結核	BCG ワクチン
ポリオ(小児まひ)	ポリオワクチン
麻疹(はしか)・風疹(三日ばしか)	はしか・風疹混合(MR)ワクチン
日本脳炎	日本脳炎ワクチン
肺炎球菌感染症(細菌性髄膜炎など)	小児用肺炎球菌ワクチン
Hib(インフルエンザ菌b型)感染症(細菌性髄膜炎など)	ヒブワクチン
水痘(みずぼうそう)	みずぼうそうワクチン
流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)	おたふくかぜワクチン
B型肝炎	B型肝炎ワクチン
子宮頸がん	HPVワクチン
インフルエンザ	インフルエンザワクチン



菌部友良先生
(日本赤十字社医療センター
小児科顧問)



ために、ワクチンのことを勉強してみませんか。

政井マヤ



Q

定期接種ワクチンと
任意接種ワクチンのちがいを
教えてください。



A

神谷先生：日本の予防接種は、定期接種ワクチンと任意接種ワクチンに分けられています。定期接種は「接種しなくてはならないもの」、そして任意接種は「接種しなくてもいいもの」と思われている方がときどきいらっしゃいますが、これは誤解です。定期と任意というのは日本の法制度上の違いによるもので、医学的には定期と任意で予防する病気の重さに違いがあるわけではありません。任意接種の中には、細菌性髄膜炎のように、かかると重い病気も含まれています。みずぼうそうやおたふくかぜも、重症化すると後遺症を残すことがあります。したがっ

て、ワクチンはすべて必要なものと考えてほしいと思います。

任意接種については、定期接種のように各自治体から接種のお知らせがありません。かかりつけのお医者さんに相談するなど、ご自分から積極的に情報を集めて、接種し忘れることのないようにしましょう。



神谷 齊 先生
(国立病院機構
三重病院 名誉院長)



Q 赤ちゃんはお母さんから抵抗力をもらっているのでワクチンは必要ないのでは？

A **神谷先生**：たしかに生まれたばかりの赤ちゃんはお母さんからの抗体（抵抗力）で守られていますが、残念ながら一生残るものではありません。お母さんからもらった抗体は、生後2か月くらいから減りはじめ、その後6か月から1年で消滅してしまいます。

それ以降は自分で抗体をつくらなければなりません。ワクチンはそのための有効な手段です。子どもが自分で抗体をつくれるようになるまでには時間がかかりますので、それまでワクチンで守ってあげることが重要です。



Q ワクチンの安全性は？

A **菌部先生**：小さな赤ちゃんにワクチンを打って、副作用はないのだろうかと心配される方もいらっしゃると思います。もちろんワクチンは体にほんのわずかですが異物を入れるわけですから、注射部位が赤く腫れるという反応（＝副反応）や熱が出ることがあります。でも、それは体の反応の一部です。接種後に心配な症状が出たときには必ずかかりつけ医の先生に相談してみてください。また、たくさんのワクチンを接種すると、赤ちゃんの免疫に影響を与

えるのではないかと心配になるかもしれません。しかし、定期・任意のワクチンを接種しても、赤ちゃんの免疫機能への負担は全能力の0.1%くらいだといわれています。

生後2か月くらいの赤ちゃんにワクチンを打つのはかわいそう、という声もよく聞きます。しかし、泣くのは注射を打つときだけです。ほんとうにかわいそうなのは、赤ちゃんが病気になって苦しむことです。ましてや重い症状を招いたり、後遺症を残すことの方がよほどかわいそうなことだと私は思います。

Q

ワクチンによって
接種回数が違うのは
なぜですか？

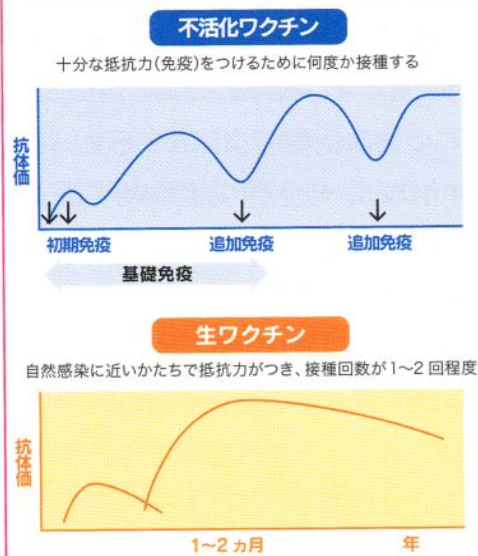


A

神谷先生：ワクチンは、大きくわけて2種類ありますが、「生ワクチン」か「不活化ワクチン」かで接種回数が異なります。生ワクチンは生きたウイルスや細菌の病原性を弱めたものです。自然感染に近い状態で抵抗力がつき、接種回数も1~2回と少なくすみます。一方、不活化ワクチンは殺したウイルスや細菌を使い、病原性をなくしたものです。十分な抵抗力をつけるためには基礎免疫(2~3回)と追加免疫(病気によって異なりますが数回)が必要です。また、同じワクチンでも、小児用肺炎球菌ワクチンやヒブワクチン(P5)など、接種開始の年齢が上がると接種回数が少なくなるワクチンがあります。これは、年齢が上がってくると抵抗力がつきやすくなり、ワクチンの接種回数も少なくて済むためです。ただし、小児用肺炎球

菌ワクチンやヒブワクチンで防ぐ細菌性髄膜炎は、1歳までの発症が多い病気です。1歳を過ぎたら接種回数が少なくて済むからといって、1歳まで接種を待つのでは意味がありません。病気にかかりやすくなる時期になる前に、接種をすませることをおすすめします。

ワクチン接種後の免疫反応



Q

最近接種できるようになった
「小児用肺炎球菌ワクチン」と
「ヒブワクチン」って
どんなものですか？



A

菌部先生：「小児用肺炎球菌ワクチン」と「ヒブワクチン」は細菌性髄膜炎などの予防のためのワクチンです。細菌性髄膜炎の症状には発熱や頭痛、けいれん、さらには意識障害などがありますが、最初は風邪の症状とそれほど変わりがなく、診断の難しい病気です。そしてかかると命を落としたり、知能障害や運動機能障害などの後遺症を残すことのある重い病気です。日本では毎年約1,000人の子どもがこの細菌性髄膜炎にかかっているといわれます。発症例の約半数が1歳未満の赤ちゃんです。

この細菌性髄膜炎の主な原因菌は、肺炎球菌とヒブです。これらの菌に対するお母さんからの移行抗体がなくなるのは生後2～3か月頃です。この頃から肺炎球菌やヒブによる細菌性髄膜炎の発症例が出てきます。したがって、

細菌性髄膜炎を予防するには、これらの菌に対する抵抗力がなくなる2～3か月齢から、この2つのワクチンをセットで接種する必要があります。なお、5歳くらいまではリスクがありますので、まだの方は接種をおすすめします。

細菌性髄膜炎を 予防するワクチン

！ 細菌性髄膜炎の予防には
2つのワクチンをセットで受けよう

細菌性髄膜炎とは
～主な原因菌は肺炎球菌とヒブ～

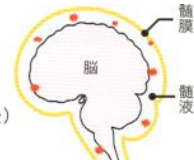
肺炎球菌

ヒブ

小児用肺炎球菌
ワクチンで予防

ヒブワクチンで予防

- 日本では毎年約1,000人の子どもがかかる
- 脳や脊髄をおおう「髄膜」や脳脊髄液に細菌が入り込み、感染をおこす病気
- 乳児や低年齢児がかかることが多い（多くは1歳前後）
- 3～5%が死亡、15～30%に脳障害などの後遺症を残す



監修：神谷 實 先生

Q

どのワクチンをどんな順番で接種したらいいのか、スケジュール管理が難しいのですが？

A

神谷先生：予防接種のスケジュールの基本は国立感染症研究所感染症情報センターのホームページなどに載っていますので、ご覧になられるといいでしょう。予防接種のスケジュールの詳細はお住まいの自治体により異なりますので、いつ、どんな順番でワクチン接種をしていくかは、

お子さんの体調をみながら、かかりつけのお医者さんとよく相談をしてみてください。同時に複数のワクチンを接種すること（同時接種）も、先生の判断により可能です。いずれにせよ、お子さんのことを日頃から観察してよく知っているお母さんから、かかりつけの先生にご相談いただくのが一番です。

●国立感染症研究所感染症情報センター 日本の小児における予防接種スケジュール
<http://idsc.nih.go.jp/vaccine/dschedule.html>



Q

もっとワクチンの情報を知りたい時にはどうすればいいですか？

A

菌部先生：まずはかかりつけのお医者さんに相談してみてください。また、お住まいの自治体の保健所や保健センターにお問い合わせいただいてもよいでしょう。インターネットにもさまざまな情報が出ていますので上

子どもを守ろう。」の会のホームページには、VPDのこと、ワクチンのこと、それから好評の接種スケジュール表も出ています。インターネットで「VPD」と検索してみてください。ぜひ積極的に情報を集めていただければと思います。



手に活用してください。私が代表を務めております「VPD(ワクチンで防げる病気)を知って、

ワクチンの情報はこちらから

- 保健所 ●保健センター
- Know VPD! <http://www.know-vpd.jp/>
- 子どもと肺炎球菌.jp <http://haienkyukin.jp/>



講師：^{かみや} ^{ひとし} **神谷 齊** 先生（国立病院機構 三重病院 名誉院長）

三重県立大学医学部卒業後、1978年 三重大学医学部小児科講師を経て、米国ペンシルベニア大学で水痘感染症の研究に従事し、1981年に帰国。国立病院機構三重病院院長などを経て現職。日本ポリオ根絶委員会委員、財団法人予防接種リサーチセンター理事、予防接種推進専門協議会委員長なども勤める。



講師：^{そのべ} ^{ともよし} **園部 友良** 先生（日本赤十字社医療センター 小児科顧問）

1968年千葉大学医学部卒業後、小児科に入局。1970年より日赤医療センター小児科勤務、部長を勤める。1998年からは筑波大学でも臨床教授として教鞭をとる。現在は小児科顧問として勤務。日本川崎病学会顧問、トラベラーズワクチンフォーラム運営委員、「VPD(ワクチンで防げる病気)を知って、子どもを守ろう。」の会運営委員代表なども勤める。



質問者：^{まさい} **政井マヤ**

元フジテレビアナウンサー。2007年に結婚、出産。現在は女兒の母として育児をしながらフリーアナウンサーとしても活躍中。ブログ「マサイマヤ族 母になる Mother to be...!」

<http://www.cafeblo.com/mayajournal/>



子ども **肺炎球菌.jp**

子どものための肺炎球菌ワクチンについての詳しい情報は
<http://haienkyukin.jp/>



ファイザー株式会社

〒151-8589 東京都渋谷区代々木 3-22-7 新宿文化クイントビル

このリーフレットは、下記のセミナーを基に構成されたものです。

新米・プレママわくわくセミナー 2010年5月30日(日) 名古屋・テレビアホール

■主催：中日新聞社 ■共催：ファイザー株式会社